

真宗信心における心理構造の研究(2)

釋 徹 宗

はじめに

社会的にみて、特殊あるいは獵奇的事件が起こった場合、ジャーナリズムや大衆の興味は容疑者の生い立ちや環境に集中する。本人の生活ぶりから始まり、性癖、両親の育て方や暮らしぶり、地域環境に至るまでを詮索し性格分析を試みる。これらの事例は、いかに環境や生活形態等の後天的要因が個人の人格形成に多大に関与しているかを示している。真宗信心の心理学的立場からの分析を試みるにあたり、今回はそういった環境や形式といった要因を儀礼という概念を用いてとりあげた。ゆえに「儀礼と宗教心理」の関係を考察してみたい。儀礼の定義は明確ではなく、広義にも狭義にも用いられるが、本論では幅広くとらえて、宗教心理との関係を考察してゆく。

1

宗教心理学的立場において、儀礼のもつ意味は大きい。あらゆる宗教は、そこにそれを営む人間が存在するかぎり儀礼を有し、個人の人格変容という現象をもたらす¹⁾。この場合の儀礼とは、身体・心情などによる宗教的行動から、それに関連する設備様式などに至るまでの広い領域を指す。つまり儀礼とはその宗教における一種のアイデンティティであるといえ、一定の様式を形成しているものもあれば、定型をもたないものもある。また儀礼の分類も様々で、主観的儀礼や客観的儀礼、あるいは対人的儀礼と機械的儀礼などに分けられる。

宗教における儀礼を大別すると、(a)発声、行儀など身体的行動に属するもの(b)建築、物品の様式など集団や教団の形態に属するもの(c)洗礼や成人式など儀式性の強いものなどがある。(a)の身体的行動には、讃歌・誦経・説教や、作法・礼拝

といったものがある。これらは公共的儀礼のケースと私的儀礼のケースでは相違点をもつ。前者は多数人の参加の下に行なわれるものをさし、後者は個人的に行なわれるものをさす。(b)は莊嚴や礼拝対象など象徴にも大きく関わるものである。(c)には個人の健康とか収獲などに関わな強化儀礼と、成人式・葬儀のように旧い段階から新たな段階への動きに伴う通過儀礼とに分けることができる。

これらのものが宗教心理を構築するうえで、また新たな人格をリストラクションするうえで大きな力となりうることはいうまでもない。宗教において儀礼と宗教体験とは密接に結びついているということがいえる。しかし、儀礼が固定化し、体験や心理から乖離して伝承性のみが強く残る場合には儀礼先行や儀礼保守化といった現象がおこる。そうなれば、宗教の機能である統合性や補償性、あるいは強化・安定といった作用が働きにくくなってゆく傾向がある。

次に儀礼の機能であるが、まずある固有の価値観をもった「場」を創り出すということが、挙げられよう。例えば、菰田稔は、祭りを儀礼的現象として捉え、その基本的性格を次の様に分析している。

(a)祭りは、周期的に神聖な時間と空間を限ってその中に成立し、実生活のそれとは違った象徴の世界を再現する文化現象のひとつである。

(b)祭りは、神話的世界観にもとづいてその始原的理想像を再現することができる。⁽²⁾

つまり世俗の中において、聖なる時間と空間とを生み出す機能を儀礼は有しているのである。そこには一時的なものにせよ、価値観の転換がおこなわれる。ユングは、象徴には深層の無意識を喚起させる働きがある、と述べている。儀礼はその働きを機能させる場だといえる。

また儀礼の機能を考察する場合、特に問題となるのが「象徴」である。象徴の定義は多様であるが、心理学においては、能記と所記とのつながりが恣意的でなく、特殊な関連や根拠があり、隠喩や換喩の意味をもつことが多いとされる。宗教学における象徴の捉え方も様々で、自然物・神像・建築・記章・神話から音や言語に至るまで広範囲にわたり、儀礼と重なる場合もある。⁽³⁾ イギリスの人類学者E・R・リーチが、儀礼を象徴的価値に関連する行動であると捉えているように、儀礼と象徴とは密接に関連するものである。象徴としての神話や物語り、彫像、絵画などは儀礼を通して生き生きと機能することができる。象徴および儀礼は聖と俗への媒体であるともいえる。

さらに儀礼は、行使されることにより人格変容におけるひとつの区切りとなるという機能をもつ。つまりそれはある地点から別の地点への移行でもある。一例を挙げると、仏教で

行なわれる剃髪などは、俗から聖への移行を意味するイニシエーションなのである。また巡礼なども儀礼を通して象徴との関わり、信仰体制を確立してゆくものであるといえる。あるいは死に臨む際の作法、儀式なども同じ意味をもつイニシエーションである。

そしてある程度定型化され伝承された儀礼は、時間を越えた信頼感、連帯感を生み出すという働きを確認することができよう。あるいは、円環や流れの中の自己を体感すると表現してもよいであろう。⁽⁴⁾これは集合的無意識層への接近でもある⁽⁵⁾。またその信頼感は、日常における（はつきりと認識し難い）罪悪感へのカタルシスという作用もある。

II

以上のことをふまえた上で、真宗信心と儀礼との相互関係及びその特徴を心理学的視座からアプローチしてみよう。

まず親鸞にみられる儀礼形態であるが、それまでの日本仏教の流れから見えて特異であったといわざるをえない。身体的儀礼に関していうならば、それまでの浄土教において中心であったところの礼拝や称名などに変わり「聞」という概念を前面に押し出している。これは儀礼という視体からすれば、極度な受け身化であるといえる。

信巻には「聞」というのは、衆生仏願の生起本末を聞いて疑心

真宗信心における心理構造の研究（2）（釋）

あることなしこれ聞というなり。」といい、『一念多念文意』には「きくといふは、本願をききてうたがふところなきを聞といふなり。」「また、きくといふは信心をあらわす御のりなり。」として、信と聞との関係をあきらかにしている。「仏願の生起本末を聞く」とは象徴化されたものに対する儀礼であり、それがすなわち宗教的心理を形成する、あるいは心理そのものであるとしているのである。しかもその形態は象徴に対する徹底した受け身の態度であり、当然自己放棄という側面を併せもつ。ここに親鸞思想による宗教的人格の最大の特徴があることはしばしば指摘されるところであり、他力信心の構造を垣間見ることができよう。

さらに親鸞における儀礼の特徴として名号を礼拝の対象としたことがあげられよう。親鸞にとって名号は浄土教体系の総てを象徴するものである。⁽⁶⁾それを礼拝対象とするということは、すなわち親鸞が表現するところの聞名という独自の形態によるものであろう。つまり名号の義・いわれを中心とした思想体系であり、その義（聞名）に即した礼拝の対象であるといえる。⁽⁷⁾

他にも臨終作法を重視しないなどの特徴が見られるが、これなども本質的に来世に力点をもつ浄土教においては異質であるといえるかもしれない。

III

親鸞以降、教団としての儀礼の確立は覚如や蓮如といった人々によって成されてゆく。それらの中で、特徴的なものを概観してみよう。

身体的行動儀礼は、親鸞時代にすでに確立しているが、その後真宗信心の形態に大きく関わったと思われるのは講の存在である。⁽⁸⁾これは公共的儀礼の範疇に入れることができるであろうが、儀礼の機能のひとつである特定の価値観による「場」に他ならない。そしてその特徴は祭祀者の役割を果たすものが希薄で、むしろエンカウンター・グループの様式に近いことが確認できる。すなわちここでは聞法の場合としての宗教的価値観の形成のみならず(他の農耕型文化圏の宗教がそうであるように)コミュニケーションや対人関係の改善、しつけなどがおこなわれるのである。柳川啓一は講の自律性を高く評価しているが、講や道場といった形態は、真宗における儀礼が在家的構成であることを物語っている。ここでは働侶は集団の構成員のために何らかの機構を果たすべく特別に研修を受けたものという役割となる。

また親鸞以降には、強化儀礼や通過儀礼に類するものも確認できる。現代を例にとれば、さしずめ報恩講や初参式、仏前結婚式などがあげられよう。報恩講などの年中行事は、相

互関係や信心の推進力となりうるのであって、一種の強化儀礼であるとなすことができる。あるいは前述の講のごとき共同体の存在は通過儀礼を生み出しやすいといえる。真宗においても同様で「身調べ」などと呼ばれるものも存在したのである。これはまことに信心が確立できているか否かを調べるもので、主にひとりの対象者を講のメンバー数人が睥睨する。それによって対象者が信心を獲得しているかを確かめるのであるが、このような儀礼は異安心として否定され今日ではあまり見受けられない。しかしその「身調べ」を改良し、パーソナリティ療法に展開させた「内観療法」というのがあり、心理療法の分野で高い評価をうけている。これは心身症やアルコール依存症、非行少年、神経症などの対象者に対し、我執、被害者意識、自己正当化の自覚をうながし、治療してゆくものである。⁽¹⁰⁾これも他力信心という心理構造の特徴を利用した例である。

むすび

「こういった一連の修業は、何だかかたちにとらわれているように思われますが。」

「そのことを申し上げようとしていたのです。若いときは、みんなのごとの本当の意味や価値をよく理解しないものです。(中略)なかでも一番感銘を受けたのは、典礼の生活でした。」

キリスト教の司教から真宗に帰依した、ジャン・ユラクルはその著書の中で、幼い日の儀礼への感動と人格への影響を素直に語っている。実際にカトリックなどの儀礼の荘厳さは、宗教のもつ一つの側面をあらわしている。これからますます儀礼論が盛んになるであろうことは想像に難くない。と同時に、その儀礼が個人の心理に与える影響も研究されていくに違いない。

親鸞が創りだした儀礼は、その他力の思想から生み出たものであった。その原理は基本的に受容であり、平等である。キリスト教には「贖罪」という概念があるが、浄土思想は徹底した「受容」に基づいていることが真宗的人格を形成してゆく。そして、阿弥陀仏の願力の生起本末を聞くことによる自己への自覚と認識が、真宗信心における構造のもう一つの柱である。真宗における信心は、他力という言葉に表現されるように、受動的であることは指摘されてきた。その意味では、儀礼の形態もまことにその信心を形成するに適合したものであったのかもしれない。

概観したように、信仰の在り方が儀礼を創りだし、そしてまた儀礼が心理を形成してゆく。このような信仰と儀礼の関連性を見るとき、真宗の儀礼は、受容・平等・現在などという特徴を確認することができる。すでに述べたごとく、儀礼はその宗教のアイデンティティーでもある。儀礼の在り方を

分析することにより、信心構造の特徴も明確になってゆくと思われるのである。またしつけや荘厳、作法、伝統といったこれまであまり信心に関連づけて研究されなかった要素の位置づけの可能性さえもっているのである。

- 1 『イニシエーションとしての宗教学』 島田裕巳 十ページ
- 2 「大嘗祭 儀礼論の試み」 藺田稔 十ページ
- 3 『心理学辞典』 誠信書房 二二三ページ
- 4 『現代宗教学3. 祀りへのまなざし』 東大出版 十二ページ
- 5 『宗教体験と深層心理』 湯浅泰雄 九一ページ
- 6 『浄土系思想論』 鈴木大拙 三四一ページ
- 7 「名号本尊の宗教的意義」 中西智海 十八ページ
- 8 「親鸞門弟の教図形成」 千葉兼隆 十一ページ
- 9 「講 宗教社会学の対象として」 柳川啓一
- 10 『パーソナリティの心理学』 大貫敬一・佐々木正宏編 二六六ページ

〈キーワード〉 真宗、心理、儀礼

(龍谷大学非常勤講師)